

生活改善事業

婦人会・婦人会の最も大きな役割であった生活改善事業は、衣食住についてその時代要請に答えるものとして展開されている歴史がある。明治大正期は婦人地位向上を目指す教育であり、無駄を節約する運動であった。戦中は出征兵士やその家族への慰問や労働奉仕など銃後の守りであった。戦後は農家の栄養不足による「くる病」が大問題となり、食の生活改善が最重要な取り組みとなった。そのために金戸の東頭ひなは福野保健所で料理講習を受けて地区で料理教室を度々開いたものである。その後は減塩運動などの食生活改善推進へと展開した。

住では資源としてのボロや牛乳パックの回収が推進された。今日でもアルミ缶や新聞・古雑誌の回収が定期的に実施されている。

衣では婦人会制服であった「事務服」の事が思い出される。戦後から五十年代初期迄の学校入学式の写真をみるとお母さんがほとんど紺色の羽織ようなものを着ている。華美な着物を控えよ

うという生活改善で決めた婦人会の制服が「事務服」なのだ。

この事務服は振袖廃止運動として成人式の振袖の成人者に華美だとして強制的に着せたという歴史もあった。

平成の金戸婦人会活動

平成五年に一組に金戸団地が造成されてから増え始め、平成九年の三組セントラル団地・平成十五年の五組常花タウン造成により、金戸の人口が急増した。世帯数が平成二十三年度において一四〇戸となり、そのうち非農家が七十四戸となっており、地区内の生活様式の多様化により「心のふれあい」が稀薄化し、共生の意識と仕組みが失われつつある。村づくりの方法や運営の在り方を見直し、逆らいがたき都会志向から少しでも金戸の気質・風土を再認識し、利己主義から利他主義への新たな村のかたちを思考することが急務となってきた。

婦人会の会員数も平成一六年を境に減少が著しくなった。非農家の加入が得られず農家世帯も退会するという悪循環が開始された。地域の役割分担である公民館掃除や地区のレクリエーション等の行事などにも支障をきたすようになってきた。

平成二十三年度には一組と二組が合同の組となったり、二・三人しかない組が出てきている。

これらの現象は青年会にも見られる問題であるが、一部の会員ばかりに負担が増えるという不平等が起こっている。行事の準備や後片付けにも協力をせず、ただ参加だけする利己的な意識がまかり通るようになった。

平成二十年代の婦人会行事としては春の資源回収・敬老会・金戸納涼祭りの準備・南山田運動会の選手選出及び運営・秋の資源回収・南山田文化祭協力（大判焼、うどん運び等）、また年間を通じてアルミ缶と牛乳パック回収を行っている。年度により着付け教室・お茶の作法教室・食改の料理教室・手芸教室・英会話教室を行った。

公民館掃除は大変な事であり月2回実施し、資源ゴミのケースや公民館の周囲の草刈りも行っていた。平成二十一年度から会員数の減少によりお盆と年末のみ行うことになり、平時は各組の当番制となり婦人会行事ではなくなった。